

## 研究科内公募プロジェクト

### 日本の高等教育におけるグローバル人材の育成

#### —留学生、帰国生の入試と教育に着目して—

代表 譚 君怡 (比較教育社会学コース)

張 燕 (大学経営・政策コース)

張 梅 (比較教育社会学コース)

井田 頼子 (比較教育社会学コース)

指導教員 恒吉 僚子 (比較教育社会学コース 教授)

#### 1. 研究の目的と構成

グローバル化・知識経済社会の進展とともに、世界に通用する人材の育成は世界各国の高等教育の重要な目標となってきた。日本でも近年、「グローバル人材」を育成するための高等教育国際化改革が重要な課題とされており、産官学連携で人材を育成していく政策が模索され打ち出されつつある(産学連携によるグローバル人材育成推進会議 2011)。こうした政策の動向では、大学自体のグローバル体質を向上させるための改革だけではなく、制度、仕組みの改革を通して、日本人学生の海外留学と優秀な留学生、帰国生の積極的な受け入れによる、双方向的に人的流動を一層強める方向性が見られる。学生の移動を促進することで、グローバルな視野を持つ「グローバル人材」の育成が期待されている。「グローバル人材」の枠組みの中で、今まで別々に論じられてきた留学生と帰国生は同じ範疇で認識されるようになり、このような多様性を持つ学生たちはグローバル化への対応策のためのリソースとされてきた。グローバル化を目指す大学の国際化改革を推進するにあたって、いかに留学生、帰国生のような多様な背景を持つ学生を包摂しつつ、彼らの多様性を最大限生かすかということが重要な課題である。これまでグローバル人材と高等教育に関して、制度や評価指標をもとに研究が進められてきたが(北村 2010他)、多様性を持つ学生当事者の視点

を切り口とする研究は少なく、前述した学生の多様性を包摂する大学のあり方を模索するには不十分である。そこで、本研究は留学生、帰国生の視点から彼らの学習の実態や学習ニーズを明らかにすることで、彼らを包摂する大学のグローバル人材育成に関する課題を提示する。

具体的には、近年の政策の方針に対応しながら、日本の高等教育における「教育」と「入試」という2つの部分に焦点を当てて3つの調査を行った。「教育」の部分では、大学の国際化の先進的な事例として立命館アジア太平洋大学(APU)と秋田国際教養大学(AIU)に対する事例調査を実施し、「入試」の部分では、留学生、帰国生の大学入試を支援する塾に着目し、留学生の進学塾、帰国生の進学塾それぞれにおけるフィールド調査を実施した。

#### 2. 留学生の視点からみた日本の大学の国際化—カリキュラムの国際化に焦点を当てて

(担当：張燕、譚)

第2章では、大学国際化の先進的な事例であるAPUとAIUを取り上げ、それぞれがカリキュラムの国際化に取り組む教育理念や実践を整理した。次にそれを踏まえたうえで、留学生のインタビューを通して、留学生の実態を明らかにした。留学生の語りから(1)多文化的な学習空間(2)柔軟な学期制度(3)英語による授業(4)柔軟

な専門という4つの分析軸にまとめ、両大学の国際化されたカリキュラムにおける留学生の学習の実態とニーズを検討した。考察した結果、留学生の出身地域、留学形態、言語力などの面によって多様な学習のニーズが存在するため、国際化制度の目標通りの成果が得られる一方で、意図しなかった結果も同時に存在する可能性があるということが明らかになった。そこから、今後の日本の大学国際化改革に対して、このような留学生の多様性を配慮するカリキュラムの充実が必要であると提言した。

### 3. 留学生の大学入試対策（担当：張梅）

第3章では、国際化の進行に伴い注目度が高まっている、中国人留学生を主な事例とし、留学生入試専門の学習塾に焦点を当てることを通して、留学生の大学受験対策問題について検討した。本章の分析を通し、以下の諸点が示された：まず、留学生入試専門塾の需要が増加した理由として主に①留学生の進学意識が強いこと②経済的ゆとりができたことという2点が挙げられた。次に、留学生が学習塾に通う主な目的として①受験に必要な学力を身に付ける②情報収集③学習環境を求めるという3点が明らかになった。そして、留学生が学習塾に通う際の問題点として、受講料の高さと通塾の距離的な遠さが挙げられた。

### 4. 帰国生入試対策塾における帰国生の知識習得過程（担当：井田）

第4章では、帰国生入試対策を実施する塾における帰国生の知識習得過程を英語のクラスにおける生徒間のやり取りをもとに明らかにした。その結果、彼らは長文の内容に関する自己の知識量の程度を教室内で他の帰国生のそれと比較・相対化させ、集団内で共有させたのち、入試で求められるとされる知識を各自で習得していることが明らかになった。つまり受験を控える帰国生にとって、受験対策とは必ずしも講師の講義を一方的に聞き

知識を習得する方法だけではなく、授業内で互いに知識の相互補完体制をとることをも重視しているのである。

それは、カリキュラムが多様な教育を受けた者が集まった際に起こりうる「新しい価値を創造する能力」(産学連携によるグローバル人材育成推進会議 2011, p. 3) に該当する姿勢だと解釈できるのではないだろうか。すなわち科目試験や小論文、面接だけでは読みとれない、彼らの知識共有による新しい価値の創造性である。本章では今後より鳥瞰した評価基軸における選抜方法の一検討材料として、今回の調査結果を提示することとしたい。

他方で、発言を控え大人しい生徒がいることも確かであり、その理由については今後さらに調査を進める必要がある。

## 5. 総括

以上の本研究の考察では、多様な背景を持つ留学生、帰国生が日本の高等教育における既存の制度に参入する際に、日本のシステムに適應していくための努力の様子から、日本の入試制度や高等教育が彼らの多様性に十分に答えて、活用しているとは言えないという現状が明らかになった。また、彼らが多様性を持つからこそ、異文化交流、知的創出のエージェントとなる可能性も示唆された。したがって、産官学連携して「グローバル人材」の育成を推進する際に、それらの多様性を持つ学生を制度的に包摂しつつ、創造的に活用していくことの重要性が改めて示唆された。本研究はそれを目標に改善するために、彼らの入試、教育の実態を解明し、そしてその課題を提示した点に意義がある。さらに、本研究は今まで同じ範疇で論じてこなかった「留学生」と「帰国生」から、多様性を持つ当事者という枠組みによって、「入試」と「教育」という複数の角度から「グローバル人材育成」政策の課題を検討した点には新規性があると考えられる。

## 引用文献

- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議、  
2011、「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」（平成23年4月28日）」  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm))
- 北村友人、2010、『グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する実証的研究』文部科学省 平成21年度国際開発協力サポートセンター・プロジェクト 研究代表者 北村友人